

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	三宮 千佳
論文題目	日本古代の阿弥陀堂の研究
<p>審査要旨</p> <p>法華寺は奈良時代に平城宮の東隣の旧藤原不比等邸に、光明皇后によって建てられた古刹である。不比等邸の南地域には不比等が中国古代の皇帝の苑を摸してつくった庭園施設があった。その後西側部分を西花苑と称していた。この西花苑を利用してつくられたのが法華寺阿弥陀浄土院である。この地は近年発掘調査がなされ、奈良時代の阿弥陀堂の遺構であることが確認された。</p> <p>三宮千佳君の学位請求論文は、奈良時代の阿弥陀堂の唯一の遺構である法華寺阿弥陀浄土院は中国の浄土堂の影響のもとに造営されたことを考察し、つづく平安時代の阿弥陀堂、さらに平等院鳳凰堂に至る古代の阿弥陀堂の造営と、それを支えた浄土思想について論じたきわめて斬新、かつ意欲的な研究である。</p> <p>本研究は、緒言、第一章「法華寺阿弥陀浄土院の造営開始時期」、第二章「法華寺阿弥陀浄土院の発願意図」、第三章「中国南朝の浄土図と皇帝の苑」、第四章「唐代の浄土院と法華寺阿弥陀浄土院」、第五章「平安時代の浄土思想と大乘菩薩道」、第六章「平安時代の阿弥陀堂と寝殿造」、第七章「平安時代の法華寺と藤原道長」、第八章「平等院鳳凰堂の発願と法華寺阿弥陀浄土院」、第九章「日本古代の阿弥陀堂」、結語から構成されている。</p> <p>まず第一章では、法華寺阿弥陀浄土院の造営開始時期について、かつて福山敏男氏は光明皇后の生前としたが、最近黒田洋子・山下有美の両氏は光明皇后の没後に、皇后の追善供養のために建立したという見解を発表した。三宮君は、福山氏が『正倉院文書』に書かれている「西花苑」を阿弥陀浄土院としたことに注目する。そして「苑」が中国古来の皇帝専用の庭園施設をあらわす語であり、また法華寺は藤原不比等邸であったころより、南地域に庭園施設が存在していた。この地が天皇家に寄贈されてから、庭園施設は西花苑と称されたが、三宮君はここに阿弥陀浄土院がつけられたと解した。つまり福山説をあらためて評価し、阿弥陀浄土院は光明皇后の生前に発願され、造東大寺司によって造営が開始されたと論じたのである。</p> <p>第二章では、阿弥陀浄土院の造営開始が光明皇后の生前であるなら、光明皇后自身の阿弥陀信仰による発願という可能性が強くなる。そこで三宮君は奈良時代の阿弥陀信仰が拠りどころとした世親の『浄土論』や曇鸞の『往生論註』等をもとに、浄土往生とは五念門の実践すなわち自利利他行の具足の上に成就するものであると論じるのである。つまり光明皇后は阿弥陀浄土院を発願するにあたり、自利利他を具足する大乘菩薩道を目指し、人々の仏教信仰による救済につとめながら、自らの大願である浄土往生へと邁進したと結論する。</p> <p>第三章では、まず東晋の支遁の「阿弥陀佛像讃並序」に記されている西方極楽浄土の景観は、現世の皇帝の苑の景観によっていることを指摘する。三宮君によると、漢代より苑の構成要素は「池」「樹木」「建物」であったが、成都万仏寺出土の石造二菩薩立像の背面浄土図は画面を分割し、「池」「樹木」「建物」という三つの要素を、現実存在する景観のように空間的なつながりや奥行きをもって描いている。そこで、中国では皇帝専用の庭園施設である苑の重要な構成要素である「池」「樹木」「建物」を参考に、浄土図が描かれたことを明らかにしたのである。</p> <p>第四章では、初唐になると前章で論じた浄土図をもとに、浄土堂もしくは浄土院が建立されていたことを明らかにする。正倉院宝物の聖武天皇宸翰『雑集』収録の「法華寺造浄土院文」によると、越</p>	

州法華寺の浄土院には現実に「池」「樹木」「建物」が存在していたことがうかがえる。聖武の妻である光明皇后も当然承知していたと推測する。そこで三宮君は、光明皇后は中国の浄土堂、浄土院の影響を受け、法華寺が不比等邸であったころから象徴的存在であった庭園施設の西花苑を、西方浄土の池に生まれ変わらせようとして阿弥陀浄土院を発願したと解するのである。

第五章では、平安時代の浄土思想では空也や源信が目指した浄土往生は、まさしく光明皇后が目指した大乘菩薩道であったと解する。また権力者である藤原道長は源信の『往生要集』を所有し、源信との個人的なつながりがあることを指摘する。道長が金峰山に奉納した金銅製経筒の願文には、自らの浄土往生とともに自らが経典を納める功德により衆生が救われることが書かれており、そこには源信の大乘菩薩道の教えが息づいていると論じる。

第六章では、道長の法成寺は池を囲むように阿弥陀堂、金堂、講堂が建てられており、このような伽藍構想は同時代の寝殿造だけでなく、奈良時代の法華寺阿弥陀浄土院などによって建立されたと解する。つまり池は極楽浄土を形成する重要な装置として伽藍の中心に据え、そのまわりに諸堂を建てたのである。また神泉苑、貴族の寝殿造や邸宅も、飛鳥・白鳳・奈良時代の天皇の苑や貴族の邸宅、さらに遡れば古代中国の皇帝の苑の影響によって造営されたと論じた。

第七章では、『延暦僧録』によると智努王は法華寺大鎮で、阿弥陀浄土院の別当であったが、元慶八年(884)の『僧綱牒案』によると藤原良世をはじめ藤原家が興福寺とともに法華寺を管理しはじめた。また『御堂関白記』の記述から道長は興福寺僧林懷を法華寺別当として派遣し、林懷と関わりながら興福寺、法華寺、その他南都の寺院の状況を把握していたことを考察する。さらに「浄妙寺願文」では道長が光明皇后の功績を承知していて、藤原氏の祖先の栄光を守り伝えようとする姿勢を指摘する。

第八章では、平等院鳳凰堂の特筆すべきは建築たる鳳凰堂が池の中島の上に建てられていることであり、その唯一の前例が法華寺阿弥陀浄土院であることに注目する。阿弥陀浄土院は光明皇后が母三千代の観無量寿堂から影響を受け、『観無量寿経』第十三観雑想観を具現化しようとして、庭園施設の池の中に阿弥陀堂を造営した。鳳凰堂の発願時には法華寺阿弥陀浄土院の前例から、池の中に鳳凰堂をつくることになった。しかし鳳凰堂は建築の耐久性から柱を腐らせないために、中島に建てたと結論する。

第九章では、これまでの検討をまとめ、日本古代の阿弥陀堂造営の一端を総括する。すなわち法華寺阿弥陀浄土院が池を中心とする庭園に造営されたのは、中国古代の皇帝の苑の景観をもとに浄土図が描かれ、さらに浄土堂が造営されたことに影響を受けていると主張する。平等院鳳凰堂は道長と頼通が奈良時代の藤原氏祖先の栄光を伝えようと、前例である法華寺阿弥陀浄土院をもとに池に浮かぶ阿弥陀堂として中島に建てたと論じた。

以上の提言はきわめて大なるものと認める。本論文が博士(文学)の学位に相当するものであると判断する。

公開審査会開催日	2012 年 5 月 26 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	大橋 一章
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	肥田 路美
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	内田 啓一
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	川尻 秋生
審査委員	東京大学・教授	工学博士(東京大学)	藤井 恵介